

「ああ、それはどうしようもないね」と、ネコは言った。

「ここでは、みーんな頭がおかしいんだよ」

——『不思議の国のアリス』（二八六五年）より

はじめに 地球の小さな征服者…………… 6

なぜネコを愛するのか／関係を舵取りする力／畏敬の念を抱いて

第1章 滅亡と繁栄…………… 20

イエネコとライオンの興亡／超肉食動物（殺すか、死ぬか）／
ヒトはネコ科に食べられて進化した／ホモサピエンスの登場によって／
野生のネコ科への大打撃／居間の小さなライオン

第2章 なついても野生を残す…………… 44

長く奇妙な道のり／なぜ人間に近づいてきたのか／肥沃な三日月地帯で／
勇気あるネコたち／やがてネコは垂れ耳になる

第3章 ネコに魔法をかけられて…………… 68

最も深い謎のひとつ／ネズミ退治には役立たない／魅惑的な緊張

第4章 エイリアンになったネコたち…………… 89

生態系を乗っ取る／ネコを家から出さないで／ディズニーの繁殖計画／
航海によって各地に広がる／ネコの虜とりになった先住民／絶滅危惧種も標的に／
島固有種の無防備／「ネコの公務員」の裏切り／島化する大陸／
環境保護かネコへの愛か

第5章 ネコから人間の脳へ感染する…………… 127

ライオンに食べられたい／トキソンプラズマの世界的権威／
なぜ感染力が強いのか／人間の心を操る／統合失調症とのかかわり／
古代エジプトのミイラにも

第6章 人間はネコに手なずけられている……………156

本物のペットに変身するとき／ネコは健康によい影響を及ぼす？／
ネコが人間を手なずける方法／室内ネコが嫌がること／パンドラ症候群／
お気に入りのインテリアは？／素晴らしい新世界

第7章 次世代のネコたち……………195

最高傑作を作る／新たな血統／純血種とキャットショー／
ネコとイヌの品種の違い／新品种はどこで生まれるか？／オオカミへの変身／
イエネコ×野生ネコ／数百万年後のネコの姿／
攻撃的なネコより柔和なネコが生き残る／ネコのダイエットは難しい

第8章 なぜインターネットで大人気なのか……………232

別の体に入り込む魂／最もバカげた創造的行為／ネコのミームが人気なわけ／
サブカルからメインカルチャーへ／詩と不意打ち／無表情だからこそ／

ハローキティは現代のスフィンクス／ライオンからイエネコへ崇拜が変わった／
喜びの代償／フェスティバルがはじまる

謝辞 268 注 (www.intershift.jp/nekoda.html)よりダウンロードいただけます

*文中「」は訳者の注記です

はじめに 地球の小さな征服者

二〇一二年の夏、デニス・マーティンと夫のボブは、エセックスの田園地方でキャンプを楽しんでいた。ロンドンから東におよそ八〇キロ、古びた海辺の町クラクトン・オン・シーから、さほど遠くない場所だ。キャンプ場の日が暮れかかるころ、デニスは焚火の煙の向こうに思いがけないものが見えたような気がした。五二歳、工場勤めのデニスは、大急ぎで双眼鏡を探し出すと、もつとよく見てみた。

「何だと思う？」と、彼女は夫に尋ねた。夫のほうも数百メートル向こうの牧草地を歩く黄褐色の生きものに目を凝らしていた。

「あれはライオンだな」と、ボブはつぶやいた。

ふたりが少しのあいだその動物をじつと見ていると、向こうもこつちを見つめているような気がした。耳がピクピク動き、少し身づくろいをし、やがて生け垣に沿ってブラブラと歩き去った。この夫婦の反応は落ち着いたもので、むしろ冷静だったとも言える（「あんな動物が野放しにされているのを見かけることは、めつたにありません」と、デニスは後に『デイリーメール』紙の記者に語っている）。だが、キャンプ場にいたほかの人たちの反応は、穏やかというわけにはいかなかった。

「なんてこった、ありゃあライオンだ」と、デニスの双眼鏡を借りて覗いた近くの人が、ひとりごとを言った。

「たいへんだ、ライオンだ！」と、別の男が叫び、自分のキャンピングカー目指して走り出したらしい。

その大型ネコ科動物は——「ヒツジの二倍くらいの大きさをしていた」との噂が広がり——間もなく夜の闇に姿を消した。警察の射撃の名手が田園地方の牧草地に集結した。動物園の飼育係が麻酔銃を手にとって来た。赤外線探知装置を備えたヘリコプターが上空を舞った。キャンプ場は閉鎖され、大物の狩りを取材するために報道陣が集まった。英国のツイッターは「エセックスのライオン」で溢れかえった。

ところが誰ひとり、その痕跡すら見つけることはできなかった。

「エセックスのライオン」は幻のネコとして知られるもので、未確認動物学的に正しい用語では、ABC（エイリアン・ビッグ・キャット）と呼ばれる。「トローブリッジの獣」や「ハーリングベリーのヒョウ」などの、捉えどころのない数多くの仲間と同じく、それはネコ科のUFOであり、旧大英帝国（英国、オーストラリア、ニュージーランド）の一部、それも大型ネコ科動物が自然界にはもういない場所、あるいはかつて一度もいたことのない場所で、とりわけよく出現している。

幻のうちのいくつかは、計画的な偽物か、動物園やサーカスから逃げ出した本物だったことが明らかにになった。だがこうして自由に歩きまわるヒョウやライオンは、実はもつとずっと馴染み深い動物

だとわかることが圧倒的に多い。ごく普通のイエネコ（野生のネコではない、飼いならされ家畜化されたネコ全般。野良ネコも含む）が、大きさを除いては生き写しの、もつと恐ろしい親戚に間違えられるのだ。

だから「エセックスのライオン」の場合も、テディベアという名の大柄で赤茶色をしたペットだったことは、ほぼ間違いない。テディを飼っている家族は、ライオン狩りの騒動があつた時はちょうど休暇で留守にしていたが、夜のニュースを見てすぐに自分のネコではないかと思つたと言ひ、新聞記者に次のように話している。

「このあたりで大きなショウガ色の……と言えば、うちのネコしかないからね」

こうしてサファリの茶番劇は幕を閉じた。

それでも、キャンプ場にいた人たちは愚かだつたのではなく、想像力に富みすぎていたのかもしれない。実際のライオンは、今では少しも恐るべき存在ではなくなった。多くの人たちは事実上、かわいそうな存在として憐れむようにさえなっている（ミネソタ州に住む熱狂的なサファリ好きの齒科医によつてジンバブエの人気ライオン「セシル」が殺されたときの、国際的な悲鳴を思い出してほしい）。かつてジャングルの王だつたライオンは、今では支配するものを何も持たない、ただの遺物になつてしまつた。アフリカのいくつかの自然保護区とインドのたつた一つの森にすがりつくようにして、わずかに二万頭が人間の保護資金と慈悲に頼つて生き残つているだけだ。その生息地は年を追うごとに狭まり、生物学者は今世紀末までに消滅するかもしれないと危惧する。

一方、かつては進化の補足説明にすぎなかつた小さくて生意気なライオンのいとこたちが、今では自然の一大勢力となつた。世界のイエネコの個体数は六億を超え、さらに増え続けている。米国内だけで一日あたりに生まれる数は野生ライオンの合計数より多く、ニューヨーク市で毎年春に生まれる子ネコの数は、野生で生息するトラの数に匹敵する。全世界のイエネコの数は、人間の愛情を二分するライバルのイヌの数を超え、最大三倍にまで達しており、おそらくその差は広がっていくだろう。米国でペットとして飼われているネコの数は一九八六年から二〇〇六年までのあいだに一・五倍になり、今では一億匹に近づいた。

同様の急増は世界的な現象で、ブラジルでもペットのネコの数は年間一〇〇万匹単位で増えている。だが多くの国では、急増する野良ネコに比べて飼いネコの数は少ない。オーストラリアには一八〇〇万匹の野良ネコがいて、ペットの数の六倍にのぼる。

自由気ままなネコに飼いならされたネコ、家をもつネコに放浪するネコ、すべてを含めたこれらのネコは、自然と文化、コンクリート・ジャングルと本物のジャングルの、ますます圧倒しつつかあるネコは街や大陸だけでなく、サイバースペースまで掌握してしまつた。今ではさまざまな面で私たちを支配する存在だ。

もくもくと上がる焚火の煙の向こうに、デニス・マーティンは真実を垣間見たのかもしれない——
イエネコは、新たな百獣の王の座を手中に収めた。

なぜネコを愛するのか

今では私たちの文化が——オンラインもオフラインも含めて——明らかにネコブームの真つただ中にある。セレブのイエネコが映画の契約に署名し、慈善活動に寄付し、ツイッタールのフォロワーとしてハリウッドの若手女優を従える。豪華なネコの絵が高級デパートの棚に並んで、ネコ専用のファッションやネコをブランドにしたアイスコーヒーブレンドが宣伝され、インターネットにはネコの写真が溢れかえる。ネコカフェでは実際にネコが監視する。そこは、さまざまなネコたちのあいだで人々がお茶を飲むという不思議な場所で、世界中の都市に続々と登場している。

ただし、こうした話題に気を取られていると、それよりはるかに興味深いことを見逃してしまう。私たちはたしかにネコ好きなのに、この動物はいつたい何なのか、どのようにして私たちといつしよに暮らすようになったのか、そしてなぜ——家の内外で——計り知れないほどの威力を發揮しているのかを、ほとんど知らない。

この緊張に満ちた関係から私たちが得るものはほとんどないらしいことを考えると、ネコをめぐる物語は厚みを増す。人間に飼われるようになった動物に対して、私たちは自分が優位に立つことに慣れきっている。従属する動物たちは人間に服従するのも人間の持ち物を運ぶのも当然で、素直に食肉処理場に歩いていくことさえ当たり前なのだ、誰もが思っているのだ。だが、ネコは新聞をとってこないし、おいしい卵を産まないし、私たちを背中に乗せてもくれない。それなのに私たちは、いつたいなぜこの生きものを身近に置いているのかと困惑することはめつたになく、何億もの数になっている事実にももちろん疑問を感じていない。それに対する明白な答えは、私たちがネコを好きだから、好きどころか愛していると言ってもよいからだ。ではなぜ、私たちはネコを愛しているのだろうか？

ネコたちの秘密はどこにあるのだろうか？

話を特にややこしくするのは、大切にされているこの生きものが、世界の侵入生物種ワースト一〇〇にも含まれているということだ。広範な生態系を傷つけ、絶滅危惧種に分類されているいくつかの動物を絶滅に追いやつてもいると非難されている。オーストラリアの科学者たちは最近、その大陸で暮らす哺乳動物にとつて、野良ネコが地球温暖化や生息地の喪失よりも大きな脅威であると述べた。ホオジロザメや毒ヘビのコモンデスアダーが山ほどの環境にあって、オーストラリアの環境大臣が「獰猛な野獣」として選び出したのはイエネコだ。当惑した動物愛好家は、缶詰のサーモンにクレームフレーシユ（サワークリームの種類）をかけてネコにスプーンで食べさせてやるべきか、それとも永遠に心を鬼にすべきなのか、決めかねることがある。

これと同じ不確かさが米国の法律にも広がっている。一部の州では「ペット信託」によつてイエネコが数百万ドルもの遺産を法的に相続できるが、別の場所では屋外に住むネコが害獣と分類されている。米国は毎年何百万匹という健康なネコを、子ネコも含めて安楽死させているというのに、ニューヨーク市は最近、迷い込んだ二匹の子ネコを助けるために巨大地下鉄網の広大な部分で運転を止めた。イエネコのこととなると、とにかく矛盾だらけだ。

人間とネコの親密さにまつわる込み入った性質が、イエネコと黒魔術とのいつまでも消えない結びつきを説明するのに役立つだろう。実際のところ、魔法使いを助ける「使い魔」という考えは——親

しみやすさと不思議さの両方を感じさせて——飼いなされたネコを適切に定義している。ネコが人間に対して振るう神秘的な、ときには腹立たしいほどの力を説明するには、おそらく魔法がぴつたりなのだ。ネコが介在する珍しくない病気についての議論にこの中世の被害妄想の最新版がよくちよく顔を出すのが、このことを雄弁に物語っている。この病気は人間の脳の組織に広がり、私たちの思考や行動を危険にさらすとされている。

私たちは自分が魔法にかけられているのではないかと心配しているようだ。

関係を舵取りする力

私自身、常に催眠術にかかったままだと白状しなくてはなるまい。私はただ単にずっとネコを飼ってきたというだけではない。人生の大半で、友人たちからヒゲのついたチーズ皿とおそろいの柄の鍋つかみをプレゼントされるような暮らしをし、ネコの模様の毛布と枕で部屋を飾り、休暇のアルバムにはあちこちに地中海のネコの写真をちりばめる。これまで、(かつては世界最大の高級ネコ百貨店ではないかと噂された) ファビュラス・フェリーニズから血統書付きのネコを購入し、保護施設や路上から捨てられたネコたちを引き取ってきた。そうすることには、個人的にも職業的にも不都合がついてまわるのは覚悟の上だ——ひどいアレルギーをもった友人の母親は、私が向かいからやってくるのに気づくと道の反対側に渡って避けるようだし、ある雑誌の取材でプレーリーハタネズミの有名な

研究コロニーを訪ねたときには、対応した科学者が無言で私のセーターからネコの毛を一本ずつ引き抜いた。ネコの匂いが、研究対象のネズミたちを怖がらせたり貴重な実験を台無しにしたりするのを避けるためだった。それでも私が自宅のカーペットに選ぶのは今も、ネコが吐いた跡がなるべく目立たない色ばかりで、まったく変わり映えがしない。

自分がネコのおかげで存在していると言える人はほとんどいないだろうが、私はそう言えるひとりだ。私の両親は、最初に飼ったネコを「しつけ」できるまでは子どもを産まないと誓ったらしい(そのネコはようやくコルクを追いかけられることを覚えたので、両親はそれで十分だと考えてくれた)。私の家族はネコ以外の動物を飼ったことがない。妹は一度、愛犬家の浴室でパニックになったロシアンブルーを救出するために六〇〇キロ以上も車を飛ばしたことがある。母親は車で長旅をするとき、ぶちネコをショールのように首にかけて移動することで知られ、通過する料金所の係員を驚かせている。

ネコはこうして私の背景にすっかり溶け込んでいたために、この小柄な完全肉食動物に住みかを提供するのが風変わりだなどと、ほとんどまったく考えたことがなかった——だがそれは、私が自分の子どもをもつまでのことだった。自分自身の子からの容赦ない要求に直面してみると、別の種の生きものの食欲やトイレの習慣に心を砕くのがバカらしく見え、ちよつとおかしいのではないかとさえ思えてきた。そして新鮮な疑念を抱きながら私のネコたちを厳密に検討してみた。この狡猾で小さい生きものは、いったいどうやって私の心を虜にしたのだろうか？ なぜ私はこんなに長いあいだ、ネコたちを自分の子どものように扱ってきたのだろうか？

こうした疑問が頭にちらつくと同時に、私は小さい子どもの目を通してイエネコを見るという経験をした。私のふたりの娘がはじめて口にした言葉は、「ネコ」だった。ふたりは、洋服もおもちゃも本も誕生日パーティーも、すべてネコをテーマにしたものを望んだ。ヨチヨチ歩きの子どもにとつて、ごく普通の小さいイエネコはほとんどライオンの大きさと同じだったから、いつしよに暮らすことで、もつと野生味に溢れた世界への疑問をつのらせたようだった。ひとりはナルニア国物語を読みふけたあと、窓から隣のネコをじつと見ながら、「アスランといっしょにいるルーシーみたいになりたくない」と、ため息まじりにつぶやいた。寝る前にはふたりとも「神様はトラを愛しているの？」と尋ね、ベビーベッドでふわふわしたネコのぬいぐるみを抱きしめた。

そこで私はこれらの生きものについてもつとよく知り、人間とネコの神秘的な関係を動かしているものはいったい何なのかを理解しようと、心に誓ったのだった。私はたまたま新聞や雑誌に動物に関する記事を書く仕事を長く続けており、アメリカアカオカミからクラゲまでのさまざまな動物の真実を追って、人間が支配する世界で生きる独立した生命体としてそれらを理解しようと、地球の果てと言えるような場所まで出かけていた。だがときとして、最高の物語はすぐ足元にある。

それは、明るい赤茶の色合いでこの本にインスピレーションをもたらすネコ、チートーがいつもいる場所だ。

チートーは私の現在のペットで、朝食前の体重が九キロあり、その父親がアライグマと戦ったと思われるニューヨーク州北部のトレーパーパークから養子としてやって来た。並外れた大きさのせい

で、配管工事に来た人は驚いてリビングルームに入るのを躊躇し、ケーブルテレビの人は友だちに見せたいからと携帯電話で写真を撮った。キャットシッターには二度目に頼むとよく断わられた。必死で餌を欲しがるチートーが、腹を揺すりながら追いかけてまわしたせいだろう。その異例の体格は、家にあるものすべてを不思議の国のアリスの世界に変え、こちらは自分が縮んだのか、ネコの方が大きくなったのか、いつも不思議に思いながら暮らすほどだ。

私のベッドの隅で丸くなっているこの巨大なクロワッサンが、生態系を一変させるほどの力をもつ種に属しているとは信じ難い。それでも生物学的に見れば、室内で飼われて甘やかされているネコは、不毛の地で生きるオーストラリアの野良ネコや都会の野良ネコとまったく変わりない。人間に飼われていようとまいと、純血種だろうと雑種だろうと、物置で暮らしていようと何層もある贅沢なキャットタワーで暮らしていようと、イエネコはすべて同じ動物だ。飼いならしの過程でその遺伝子と行動が永久に変化したもので、人間を見たことがあるかはいかに関係がない。飼いネコと野良ネコは何度も交雑して互いを維持して勢いづけており、飼いネコとして生まれて野良ネコとして死ぬことも、その逆のこともあり得る。両者の唯一の違いは、置かれた環境と、呼び方のもつ意味しかない。

そして、チートーは餌の入った皿が見つからない場所では生き残れそうにないとしても、「今すぐ餌をよこせ」と有無を言わず態度で示す粘り強さが、ある重要な真実を示している——イエネコは、とても威厳のある動物なのだ。それは、イエネコが最も賢い生きものだからではない。最も強い生きものだからでもない。特にジャガーやトラなどの近い親戚に比べてみれば、それは一目瞭然だ。

体が小さい上に、ネコ科のほかのメンバーを絶滅へと向かわせているのと同じ体の作りと、負担の重たいタンパク質中心の栄養必要量という宿命を背負い込んでいる。

だが、イエネコは究極の順応性を備えている。どんな場所でも暮らすことができる上、大量のタンパク質を必要としてはいても、ペリカンからコロギまで動くものならほとんど何でも食べるし、ホットドッグのように動かないものでもたいいはいは食べてしまう（それに対して危機に瀕しているネコ科の親戚のなかには、チンチラの希少種のみを捕らえて食べるよう適応しているものもいる）。イエネコは睡眠の習慣や社会生活も微調整できる。そして狂ったように子孫を作れる。

私はネコの発達史を掘り下げること、この生きものを新たな、これまでより広い意味で称賛せずにはいられなくなった。そして何十人も生物学者、生態学者、その他の研究者たちにインタビュースてみると、それらの研究者の多くもネコを称賛しているように感じられ、ときには本人の気づかないうちにそんな本音が出ていた。近年はネコ好きであることと自然科学のプロであることの区別をはつきりさせているうえに、科学者はネコを生態系の脅威とみなすグループと結束することが多いのだから、これはちよつと意外なことだった。一方で科学の分析的な側面は、ネコ科の機微と神秘の核心を侮辱しているように思える——すつかり魅了されたネコ好きにとつて、自分のペットの奇跡的にも見える暗視能力を説明するのに「有利なアミノ酸置換」を持ち出されるのは、（退屈なのはどうでもなく）不快なことだろう。

それでもネコについての最も説得力があつて独創的な説明は、やはり専門誌の論文で見つかる。たとえば、ネコは「日和見主義で謎めいた孤独なハンター」、「奨励金つきの捕食者」、「陽気で繁栄をきわめる不当利得者」などだ。そして私がこの本を書くためにインタビュースした科学者たちの多くは——大半とは言わないまでも——危険にさらされたハワイの動物相や脳に潜むネコの寄生生物、古代人類の祖先のかじられた骨などと研究対象はさまざまに異なつていても、自分でネコを飼つていた。

イエネコがもつ順応性の最も重要な特徴とイエネコの強さの最大の源は、人間との関係をうまく舵取りする力にあるのだから、たぶんそれは驚くようなことではないのだろう。ときには国際的な傾向に便乗し、人間が作り上げてきた世界を自分たちにとつての恩恵としてしまう。たとえば都市化は、イエネコたちの将来の見通しに恵みをもたらしてきた。今では世界人口の半数以上が都市で暮らしているために、窮屈な都会生活には小柄で手がかからない（と言われる）ネコのほうがイヌよりも適しているように思われ、人々はペットとしてネコを購入する傾向が強まっている。ペットが増えれば野良ネコも増えることになり、野良ネコは人間が近くにいても気にならないネコの遺伝子を共有するから、騒がしくストレスの多い大都会に潜むほかの動物より有利になつている。

ただし、人間との関係をうまく舵取りするにあつて、ネコはただ漫然と過ごしているわけではない。堂々と主導権を握つており、最初からずつとそうしてきた。イエネコは人間に飼われるようになった動物のなかでは珍しく、飼われることを自ら「選んだ」と言われていて、幸運にも備わっている魅力的な外見と入念な行動によつて、現在では私たちの家庭、大型のマットレス、人々の想像力そ

のものまで支配している。インターネットを席卷しているような最近の現象は、単にずっと続いている世界制覇の最新の勝利にすぎず、その制覇に終わりはない。実際のところ、ほんの小規模な乗っ取りは私たちの家庭で毎日数えきれないほど起きており、新たにイヌを飼いたい人は大部分が自分から探し出さなければならぬのに対し、ペットのネコはある日の夕方、裏口にひょっこり姿をあらわして勝手に家の奥まで入ってくるのが、統計的に見て多いようだ。

畏敬の念を抱いて

人間によって支配された世界でイエネコが生き残るためにとる行動は印象的で独自のものだが、ネコたちの物語には普遍的な意味合いが含まれている。それは、たった一回の、無害と思われる何気ない人間の行動——誰かが小柄な野生のネコ科動物に興味をもって、家族の団欒に自由に入入りさせ、最終的には家族の心に受け入れられるというようなもの——が、やがて世界的な成り行きを引き起こし、マダガスカル島の内陸部の森林から統合失調症の病棟へ、さらにオンライン掲示板へと広がっていくかもしれない事実の一例だ。

ある意味では、イエネコの台頭は悲劇と言える。イエネコへの偏愛が、ほかの多くの生きものを滅ぼしてもきたからだ。イエネコは渡り者の成り上がりで、これまでで世界を最も大きく変えてきた侵入者だ——もちろん、ホモサピエンスを除いての話だが。イエネコが生態系に登場するとライオンそ

の他の大型動物が姿を消していくのは、偶然の一致ではない。

それでも、イエネコの物語は生命をめぐる不思議の物語、驚くべき自然の継続力の物語でもある。それをよく知れば、私たちは自分中心の考えを改めるだけでなく、ついつい赤ちゃん扱いして守ろうとしてしまう生きものを、もっと冷静な目で見るチャンスを得られる。その生きものの地平は私たちのリビングルームやネコ用トイレにとどまることなく、はるか彼方まで広がっている。イエネコは現実には毛皮を着た赤ん坊などではなく、もつと非凡な、地球全体を手中に収めた小さな征服者と呼べる存在だ。イエネコは人間なしでは存在していないはずの生きものではあっても、私たちが実際にイエネコを作ったわけではなく、現在、私たちがイエネコを制御できているわけでもない。その関係は所有しているというよりも、援助し、手を貸しているというほうが近い。

愛らしい仲間をこうした冷たい目で見るのは、裏切りのように思えるかもしれない。みんな、ネコは愛玩動物で人間に従属するものだと考えるのに慣れきっていて、進化上の自由契約選手だと思っていない。私はこの本について話をするようになってすぐ、母親と妹から投げかけられる非難がましい意見に、いちいち対応しなければならなくなった。

それでも、本物の愛情には理解が必要だ。ネコたちにウツトリする気持ちはますます強まっているというのに、私たちはネコが受けるに値するものを実際には与えていないのかもしれない。

チートーのような生きものへの正しい対応は、いい子だとささやくことではなく、畏敬の念を抱くことではないだろうか。